

職

人の熟練した技術と、最新のテクノロジーを投入してつくられるのが、ヤマハトランペットのカスタムモデル。そのなかで、著名なアーティストの名を冠し、本人が使う楽器の特別仕様を採用したのがシグネチャーモデルだ。

このたび、長きにわたりヤマハと二人三脚で開発を行ってきたトップアーティスト、エリック・ミヤシロ監修の通称「EMモデル」が17年ぶりにモデルチェンジ。「YTR-8340EM」(第1世代)から「YTR-8330EM」(第2世代)となり、パワーと瞬発力のあるサウンドはそのままに、より楽に、より自由に吹ける、操作性の高い楽器に進化を遂げた。

「17年ぶりと言ってはいますが、その間、第1世代の改良を続けており、エリックさんから『ヤマハにこういう技術があるようだけど、何かつくってみたい?』といった提案が断続的にあり、試作品をつくってはうまくいかず……のトライ&エラーを繰り返してきました。モデルチェンジに向けて本格的に開発がスタートしたのは2018年ですが、このタイミングになった理由としては、ほかのカスタムモデルの開発で得た技術、アイデアが蓄積してきたことや、エリックさんがより幅広い音楽表現を求めるようになってきたことが挙げられます」と、第1世代、第2世代ともに開発を担当した福田徳久さん。

モデルチェンジで目指したのは、アーティストが頭の中に描くイメ

細部のパーツに至るまで



(写真左より)エリック氏とやり取りしながら試作品の設計、スペック決めを行った開発担当の福田徳久さん、試作品を生産工程に落とし込むところを担当した設計担当の和田幸平さん、マーケティングを担当する西村壮史さんと堀場信明さん。

ジを効率よく音に変換できる楽器。また、エリック氏のインスピレーションを刺激し、音楽ジャンル、演奏スタイルが多岐にわたる氏の音楽を、高いレベルで表現できる楽器にする必要があったという。

小さなパーツの小さな変化が楽器を大きく進化させる

突破口となったのは、エリック氏の師匠でもあるボビー・シュエが監修した「YTR-8310Z」(第2世代)のバルブケーシング。同モデルの開発を行ったのは、今回設計を担当した和田幸平さんで、和田さんが先んじて開発したバルブケーシングがモデルチェンジの起点になったという。

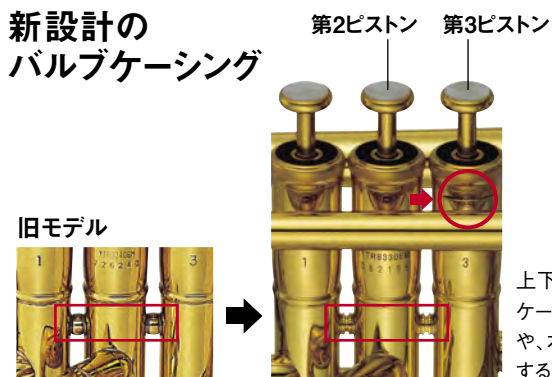
「トランペットの心臓部であり、楽器全体に影響するバルブケーシングを起点に、ボアサイズ(直管

部の内径)、マウスピースレシーバー、リードパイプと、ほかの部分に変更、調整を加えていきました。さらに、ピストンバルブをつなぐ支柱、主管拔差管の支柱など、細部のデザイン、位置を変更しましたが、一見違いがわからないわずかな変化が、息の抵抗感のバランスや音色のコントロール性など、楽器の性能を上げる鍵になりました」(福田さん)

トランペットに限ったことではないが、一般的に良いとされるスペックを足し合わせても、優れた楽器になるとは限らないのが開発の難しさ。福田さんによると、優れた楽器とは、さまざまな要素を積み木のように組み合わせ、絶妙なバランスで成り立っているものだという。今回ヤマハのトランペットとして初めて採用した素材、フォス

緻密に計算された管体設計

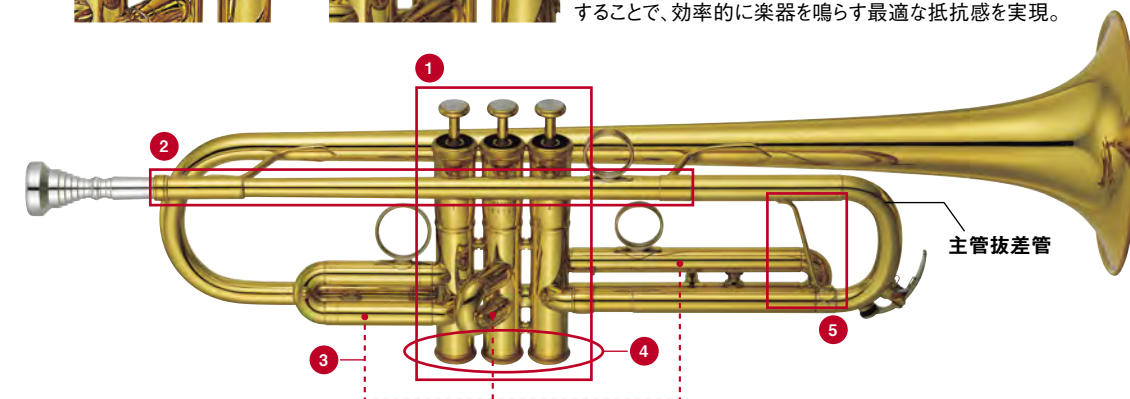
1 新設計のバルブケーシング



上から見た図

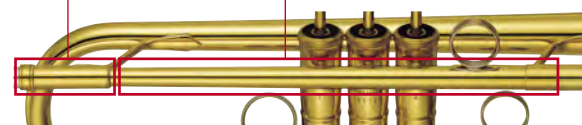


上下のパーツをハンダ付けした、真ちゅう製の二体式バルブケーシング。ピストンバルブ同士をつなぐ支柱の形状の変更や、本体とつながる支柱を第2ピストンから第3ピストンへ移動することで、効率的に楽器を鳴らす最適な抵抗感を実現。



2 新設計のリードパイプ&レシーバー

マウスピースレシーバー リードパイプ



マウスピースを差し込むレシーバーと、それにつながるリードパイプの形状を新たに設計。適度な抵抗感が生まれることで、高音域の吹奏感、コントロール性能がさらに向上。

3 ボアサイズの変更

拔差管の直管部のボアサイズ(内径)を、第1世代のLボアから一般的なMLボアに変更。さらに主管拔差管はLボア、ピストンの管はMボアと、複数のボアを組み合わせるステップボアにより、全音域において一定の吹奏感とムラのないサウンドを得られる。

ボアサイズって何?

管体の直管部の内径(直径)を指し、サイズが小さい順にMボア→MLボア→Lボアとなる。ボアサイズが大きいほど息の量が必要とされるが、吹奏感は楽器全体のバランスで決まるため、ボアサイズだけで判断できないところがある。

4 フォスファールブロンズ製のパーツ



ヤマハトランペットとして初めて、バルブケーシングのボトムキャップとストップバーネジの素材にフォスファールブロンズを採用。主に中～高音域において、倍音の豊かさが向上している。

5 独自設計の支柱



主管拔差管にある支柱は、「EMモデル」の外観の特徴にもなっている独自形状を持つ。第2世代では位置を少しずらすことで、全音域における最適な吹奏感を実現。